

Although と Though

—ブラウンコーパスとLOBコーパスの調査結果に基づいて—

溝端清一（近畿大学）

I. はじめに

The Oxford English Dictionary によれば、*although* は本来 *all though* の二語からなり、*though* の強意形であったのであるが、1400年までには *though* の単なる異形として *although* と一語で綴られるようになった。¹⁾ 現代英語においては、譲歩を表す接続詞として両者は意味上同義とされているが、語法上の相違については各語法書並びに辞書においていくつかの特徴が述べられている。

英国系の語法書や辞書の多くは、*though* は informal な話し言葉や書き言葉で用いられる傾向があるとしているが、²⁾ 米国系の語法書並びに辞書の中には *although* と *though* は interchangeable で formality の面での差は確認できないとしている。³⁾ 国内の語法書や辞書の場合、その多くが大なり小なり Fowler(1983)の記述を踏襲していると言える。つまり、1) 接続詞として両者は interchangeable である。2) *though* の方が *although* より一般的である。3) *although* は formal な文体において好まれる。4) 主節に先立つ位置では *although* の方が用いられる。5) *although* は仮定よりも事実を述べるときに用いられる傾向がある。⁴⁾ それら以外に特徴的な記述がなされているものを挙げるなら、*Merriam-Webster's Dictionary of English Usage* (1989) では *though* の方が shorter であるがため *although* よりも頻繁に用いられるとしている。*Kenkyusha's New Collegiate English-Japanese Dictionary* 5th ed.(1985)では、主語と *be* 動詞が省略されるのは *although* の場合まれであるとする。

本稿の目的は、以上のような語法書や辞書で記述されている *although* 及び *though* についての用法を実例調査を通じて再検討することにある。実例調査をする上で用いたコーパスは、1961年に米国で出版された15のジャンルを代表する各2000語の500サンプルよりなる約100万語のコーパスである "The Standard Corpus of Present-Day Edited American English" (通称ブラウンコーパス)と、同じく1961年に英国で出版された15のジャンルを代表する各2000語の500のサンプルよりなる約100万語のコーパスである "The Lancaster-Oslo/Bergen Corpus of British English" (通称LOBコーパス)である。編纂時期並びに編纂方針が同じであるため、英国英語と米語の比較研究をする上で理想的と言えるこれらのコーパスを用いて *although* と *though* の出現環境をジャンル別に調査した。⁵⁾ 両コーパスのジャンル内容は表1の通りである。

although と *though* を調査するにあたって、節 (clause) の形で出現するものと主語や動詞などが省略された句 (phrase) の形で出現するものとに分け、それぞれにおいて主節の前 (initial)、主節の中 (medial)、主節の後 (final) での *although* 並びに *though* の出現頻度を見た。尚、*as though* や *even though* のような例は除き、単独の接続詞として用いられているもののみを調査対象とした。

表1 ブラウンコーパスとLOBコーパスの内容一覧

ジャンル	サンプル数	
	BROWN	LOB
i) Informative Prose		
A Press: reportage	44	44
B Press: editorial	27	27
C Press: reviews	17	17
D Religion	17	17
E Skills, trades and hobbies	36	38
F Popular lore	48	44
G Belles lettres, biography, essays	75	77
H Miscellaneous (government documents, foundation reports, industry reports, college catalogue, industry house organ)	30	30
J Learned and scientific writings	80	80
ii) Imaginative Prose		
K General fiction	29	29
L Mystery and detective fiction	24	24
M Science fiction	6	6
N Adventure and western fiction	29	29
P Romance and love story	29	29
R Humour	9	9
合計	500	500

II. 調査結果

(1) ブラウンコーパス

表2において示されているように、*although* は *though* に比べて圧倒的に節の形で出現する。主節に先立つ位置では *although* が好んで用いられるとする語法書や辞書が多いのであるが、情報散文の場合、出現位置は *although* ばかりか *though* においても節では文頭に最も多く現われる。しかし、句の場合は、両者とも主節の中の位置で最も多く現われる。創作散文の場合、*although*、*though* の出現位置は特に節では両者とも *though* の一例以外主節の前と主節の後だけで、両者の出現比率は殆ど変わらない。

formal な文体の散文が集まっていると言える情報散文では F のジャンル以外 *though* より *although* の頻度が高く、informal な文体の散文の集まる創作散文では、R のジャンル以外 *though* の方が頻度が高いという結果である。両種の散文をそれぞれ総じて見るなら情報散文では *although* の方が *though* よりかなり頻繁に出現すると言え、創作散文では *though* の方が *although* より出現頻度が高いと言える。情報散文と創作散文の区別

表2 ブラウンコーパスのジャンル別頻度表

<i>although</i>						<i>though</i>						
clause			phrase			clause			phrase			
initial	medial	final	initial	medial	final	initial	medial	final	initial	medial	final	
i) Informative Prose												
A	11	0	12	0	0	0	6	0	2	0	0	0
B	8	0	5	1	0	1	3	0	5	1	0	0
C	8	0	8	1	1	0	2	0	4	1	2	1
D	11	0	2	1	2	0	5	1	7	0	1	1
E	8	1	5	1	0	0	1	2	6	0	0	1
F	14	1	11	0	1	1	14	1	8	1	6	1
G	29	2	20	2	7	3	17	2	15	5	6	3
H	10	0	2	0	1	0	2	0	0	1	1	1
J	42	2	31	4	3	2	17	4	10	3	11	3
小計	141	6	96	10	15	7	67	10	57	12	27	11
ii) Imaginative Prose												
K	4	0	5	0	0	0	8	0	4	0	3	1
L	3	0	1	0	0	0	2	0	3	1	1	1
M	1	0	3	0	0	0	3	1	6	0	1	0
N	8	0	6	0	1	0	5	0	7	1	1	2
P	2	0	4	2	0	0	4	0	7	1	0	1
R	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
小計	20	0	20	2	1	0	22	1	27	4	6	5
合計	161	6	116	12	16	7	89	11	84	16	33	16

表3 LOBコーパスのジャンル別頻度表

<i>although</i>						<i>though</i>						
clause			phrase			clause			phrase			
initial	medial	final	initial	medial	final	initial	medial	final	initial	medial	final	
i) Informative Prose												
A	15	3	10	6	1	0	6	2	9	2	2	3
B	9	1	11	0	0	0	1	2	9	0	2	2
C	5	0	2	0	2	0	5	2	7	0	7	2
D	2	1	3	0	0	0	4	2	9	0	3	2
E	17	0	17	3	4	0	5	1	15	2	4	5
F	17	2	16	2	3	1	14	1	15	0	8	0
G	30	5	12	2	2	1	24	7	39	5	16	8
H	14	0	11	1	2	0	1	1	5	0	1	3
J	50	0	40	5	2	1	12	2	36	0	10	6
小計	159	12	122	19	16	3	72	20	144	9	53	31
ii) Imaginative Prose												
K	8	1	7	0	1	0	13	2	15	1	4	4
L	2	0	0	0	1	0	4	0	4	0	2	3
M	0	0	2	0	0	0	7	0	2	1	0	3
N	2	0	7	1	0	0	6	1	6	0	1	1
P	6	1	7	1	0	0	7	0	6	0	0	1
R	2	0	1	0	0	1	1	1	3	0	1	0
小計	20	2	24	2	2	1	38	4	36	2	8	12
合計	179	14	146	21	18	4	110	24	180	11	61	43

なく総じて見た場合、*though* より *although* の出現頻度がずっと高く、*though* の方が一般的あるいは頻繁に用いられるとは言えない結果である。

although は仮定よりも事実を述べる時に用いられる傾向があるとする語法書や辞書が多いのであるが、筆者が *although* 及び *though* の節内で仮定法の助動詞 *could, should, might, would* を伴った用例を集めたところ、*although* は7例、*though* は16例という結果であった。*though* ほどではないが *although* においても仮定を表す表現がかなり出現すると言える。

(2) LOBコーパス

although が節の形で非常に多く出現するという点では、ブラウンコーパスと変わりがない。情報散文の場合、*although* は節、句とも主節の前で、*though* は節の場合は主節の後で、句の場合は主節の中で一番多く出現する。創作散文の場合、*although* の節では主節の後が多く、句の場合はブラウンコーパスと同様出現頻度自体が極めて少ないという状況である。*though* では、節では主節の前が一番多いのであるが、句の場合主節の後が一番多いという結果である。

情報散文では、C、D、Gのジャンル以外 *although* の出現頻度が高く、創作散文ではPのジャンル以外 *though* の出現頻度が高い。総じて見た場合、情報散文においては *although* と *though* との間には頻度差は殆どなく、formality の点から見た場合、両者に何らかの区別が存在するとは思えない。だが、創作散文の場合、*although* よりも *though* の方が二倍も多く出現する。情報散文と創作散文の区別をせずに見た場合でも *though* の出現頻度が高く、これは明らかに英国英語では *though* が好まれることを示していると言える。

仮定法の助動詞 *could, might, should, would* を *although* の節内に伴うものは21例、*though* は16例という結果で、この限りでは *though* より *although* の方が仮定の表現が多く、語法書や辞書での指摘とは逆である。

III. まとめ

本稿ではブラウンコーパスとLOBコーパスを情報散文と創作散文とに分け、又、更にそれらの散文をジャンル別に調査して、語法書や辞書で記述されている *although* 及び *though* の用法について検討を加えた。formality の面では、LOBコーパスの場合、情報散文で見える限り *although* の方が formal な文体で好まれるとは言いきれない。ブラウンコーパスの場合、情報散文では *although* の頻度が高く、創作散文では *though* の頻度が高いという結果から、文体の違いが *although* と *though* の選択に影響を与えていることを確認することができた。

出現位置についても、ブラウンコーパスとLOBコーパスで違いが見られる。ブラウンコーパスの情報散文では、節の場合、*although* 及び *though* とも主節の前が好まれるが、句の場合は、主節の中が好まれる。一方、創作散文の場合、特に節において、主節の前と後でほぼ同率で出現する。LOBコーパスの情報散文では、*although* の場合、節及び句とも主節の前に多く出現するが、*though* の場合、特に節では主節の後で頻出する。創作散文では情報散文とは反対に、節の場合、*although* は主節の後で、*though* は主節の前で多く出現する。

although は仮定より事実を述べる時に多く用いるとする語法書や辞書が多いのであるが、今回の調査で *although* においても事実ばかりか仮定の表現がよく出現することが分った。又、先に述べた米国系の語法書で *though* の方が *shorter* なので *although* より頻繁に用いられるとする説明はブラウンコーパスで見ると限り当てはまらない。更に、表2と表3における *although* の句の頻度数から判断するなら、主語と *be* 動詞が省略されるのは *although* の場合まれであるとは言い難い。

以上、ブラウンコーパスとLOBコーパスのジャンル別の事例調査を通じて、*although* と *though* について語法書や辞書で述べられている用法に多少なりとも再検討を加えることができたと考える。

Notes

- 1) Murray, A.H. et al. (1888-1933), *The Oxford English Dictionary*(Clarendon), Vol.1 A-B, p.258 参照。
- 2) Swan, M. (1980), *Practical English Usage*(Oxford University Press), p.47, Fowler, H.W. (1983) *A Dictionary of Modern English Usage*(Oxford University Press), p.637 and Quirk, R. et al. (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*(Longman), p.1097 参照。
- 3) *The American Heritage Dictionary* (New Laurel Edition, 1983), p.19 and Gilman E.W. (1989), *Merriam-Webster's Dictionary of English Usage*(Merriam-Webster), p.85 参照。
- 4) Fowler, H.W. (1983), p.637 参照。
- 5) ブラウンコーパスとLOBコーパスを調査するにあたり、パソコン用に開発された文章解析ソフトである Micro-OCP を用いた。